古津八幡山弥生の丘展示館　企画展２　　展示解説パンフレット

豪族居館 －王の暮らす屋敷－

2018. 8．7（火）▶12．2（日）

展示の趣旨

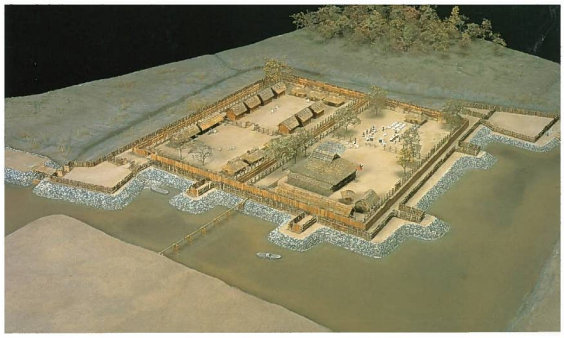
古墳時代はその時代名称が示すとおり、南は九州から北は東北地方まで、高塚の古墳が各地で盛んにつくられました。古墳には前方後円墳や前方後方墳などさまざまな形が見られ、またその規模も古墳によって異なることなどから、お墓であると同時に、政治的な構造物としての側面も持っていると考えられています。当時の地域史を考える際、各地に存在する古墳は重要な情報を与えてくれます。

他方、1981 年に群馬県の三ツ寺Ⅰ遺跡で見つかった大型の竪穴住居やそれを囲う柵列や堀などを伴う集落は、一般集落との隔絶性から「首長居館」・「豪族居宅」・「首長居宅」・「豪族居館」（以下、豪族居館）などと呼ばれ広く認知されてきました。豪族居館の事例は各地で増加しており、群馬県では一古墳につきひとつの豪族居館が対応する可能性まで指摘されています。一方、事例が増加するにつれて、その規模や内容などが非常に多様であることも明らかになってきています。

地域の古墳時代像を明らかにしていくためには、古墳に加え、古墳をつくった豪族の屋敷である豪族居館、さらには一般集落の動向や様相について検討していく必要があります。しかし、豪族居館や集落で全面的な発掘調査が行なわれている事例は少なく、豪族居館の実態や古墳との関係などを明らかにし、当時の古墳時代像を復元していく作業は今後の大きな課題といえます。

さて、新潟市内には県内最大の古津八幡山古墳をはじめ、これまでに８基の古墳が確認されています。これらの古墳をつくった豪族の居館について、確実なものはまだ見つかっていませんが、舟戸遺跡（秋葉区）や御井戸遺跡（西蒲区）など、いくつかの遺跡が候補として挙げられます。

本企画展では、東日本の主な豪族居館やこれまでの調査・研究成果などを概観するとともに、市内の豪族居館候補の遺跡について見ていきます。



三ツ寺Ⅰ遺跡推定復元模型
（かみつけの里博物館 1999 『よみがえる５世紀の世界 かみつけの里博物館常設展示解説書』から）

豪族居館について

豪族居館の定義は研究者によってさまざまですが、一般的には、古墳に葬られた豪族（首長）が生前に活動の拠点としていた場所で、大型住居などの居住施設や祭祀遺構、祭殿などの政治的建物、倉庫などの貯蔵施設のほか、手工業生産の工房が存在するものもあり、また周囲に濠や柵、張り出し部などの外郭施設の発達する場合が多いと考えられています。

豪族居館の分布は、南は熊本県から北は岩手県の東北地方まで確認されており、古墳の分布と近い様相を示しています。なお、新潟県内では確実な豪族居館は今のところ確認されていません。

立地については河川の近くや合流点に立地する場合が多く、水上交通が重視されていたことが指摘される一方、水上交通と陸上交通の結節点という要衝に位置する例も存在します。

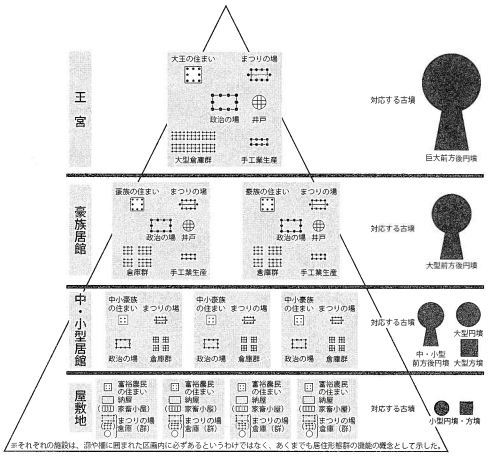
豪族居館の存続期間については多くの場合は短期間で廃絶し、群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡のような３時期ほどの長期にわたる事例は例外的と考えられています。

なお、豪族居館では渡来系遺物や他地域の土器、威信財が出土するケースも多く、首長が新来の技術や製品、知識を、場合によっては渡来系の人々などを介して得ながら地域の開発を推し進めたこと

や、また豪族居館が物流の拠点として機能していたことなどが推測されています。

古墳の形や大きさの違いなどから、古墳をつくった有力者の中にも様々な階層があるように、豪族居館においても面積や濠の規模などに差異が認められます。

新潟大学教授の橋本博文氏は、遺構からみた居住形態の階層構造について、①大王の宮（王宮）②豪族居館③中間層居宅（中・小型居館）④有力農民層屋敷（屋敷地）⑤一般集落の大きく５つに区分しています。そのうち、①から④について概念図を示しており、それぞれ対応する古墳として①各時期の列島最大の前方後円墳②地域最大級の前方後円墳③中・小型前方後円墳や大型円墳・方墳④小型円墳・方墳を示しています。豪族居館についても一辺 80m～100mクラスの大型居館（上記②）、同 60m～80mクラスの中型居館（上記③）、同 40～60mクラスの小型居館（上記③）と、大きく３ランクほどに分けられる可能性について指摘しています。



階層性をもつ居住形態群の概念図
（橋本博文 2013「古墳時代の居住形態群」『古墳時代の考古学６　人々の暮らしと社会』同成社から）

古津八幡山古墳と舟戸遺跡

（１）古津八幡山古墳

古津八幡山古墳は直径 60mの円墳で、古墳の斜面中ほどに幅約４～５ｍの平坦面（テラス）が巡ります。南西部には巨大な周濠が掘られており、この周濠を掘って出た土をおもに利用して古墳を高く築いていました。また、古墳の南東部にも周濠が掘られており、周濠と周濠の間は途切れ、通路として利用された可能性があります。なお、古墳南東部の周濠から鉢が１点出土しています。破片のため細かい年代を知ることは難しいですが、古墳時代中期の可能性が高い資料です。

古津八幡山古墳には、東日本の墳墓で古くからあるつくり方（中心部に小丘をつくること・中心部から外側に向かって盛土を行うこと）と、畿内などの墳墓の多くで古くからあるつくり方（土手状の盛土、平らな工程面）の両方が確認されました。このことから、畿内から技術者が派遣されてきて、在地の技術者と一緒に古津八幡山古墳をつくった可能性も指摘されています。

國學院大學の青木敬氏は、古津八幡山古墳と築造方法が酷似する古墳として千葉県大厩浅間様古墳をあげ、両者は近接した時期の古墳と理解するのが自然としました。大厩浅間様古墳の年代は、出土遺物から古墳時代前期末から中期初頭頃に位置づけられます。古津八幡山古墳は、出土遺物や築造方法の特徴などから、古墳時代中期前半頃の古墳であると推測されます。

越後平野は新潟県内で前期古墳が多く存在する地域ですが、古墳時代中期になると古墳の数が減少します。古墳時代中期前半頃の古墳としては、近年、新潟市東区で見つかり話題になった牡丹山諏訪神社古墳や古津八幡山古墳など数えるくらいしかありません。古津八幡山古墳は県内最大の古墳であり、越後平野のいくつかの地域の豪族が共同して推し立てた王（有力な豪族）の墓であった可能性が考えられています。

（２）舟戸遺跡

舟戸遺跡はＪＲ信越本線古津駅の西側に位置します。遺跡の範囲は広く、北東から南西方向に約 800m、北西から南東方向に最も距離のあるところで約 480mの範囲で広がっています。新津丘陵西側の裾部から広がる平坦域にあり、旧大通川の自然堤防上の微高地（現在の標高約５～６ｍ）に立地しています。現在、遺跡の大部分は宅地や水田、畑です。これまでの調査で確認された古墳時代の基盤層の標高からは、古墳時代に遺跡中央付近に東西方向の微高地が存在し、その微高地を中心に居住域が

広がっていたことが推測されます。1978 年国土地理院発行の土地利用図を見ると、古津駅の南側から西へ向かって畑・果樹園が列状にのびており、これがかつての微高地を反映する可能性があります。

舟戸遺跡は昭和 20 年代後半に行われた耕地整理の際に多くの土器が出土したことから遺跡として登録されました。これまでに本発掘調査２回のほか、確認調査や工事立会が多数実施されています。弥生時代から室町時代の遺物が出土していますが、遺物の大半は古墳時代のものです。

遺跡中心部の本発掘調査は、平成５（1993）年に建設会社の社屋建設にともない約 520 ㎡が調査され、古墳時代中期を中心とする遺構や遺物が見つかっています。

遺構では、竪穴住居４軒や掘立柱建物１棟、直線的に約１ｍごとに等間隔で配置された３列の杭列などが見つかりました。竪穴住居の中には、竈をもつ可能性のある１辺約 7.5ｍと規模の大きな住居もあります。出土した土器の年代や竪穴住居・掘立柱建物の方向の違いなどから、少なくとも２時期にわたって集落が営まれていたことが推測されます。

杭列の広がりについては調査範囲が限られているため不明ですが、一般集落ではあまり認められないことから、有力な集落を示す要素として注目されます。また、大型の竪穴住居が竈をもつとすると、県内で竈をもつ住居としてはもっとも古い事例となります。

1993 年の調査で検出された竪穴住居の柱と杭列を比較すると、材の直径や先端部の加工のしかたなどが異なっています。柱は直径が 15㎝ 前後で先端部が平らに加工されているのに対し、杭は直径 10㎝ 未満のものが多く、柱の方が杭に比べて直径が大きいことがわかります。また、根元の加工については、杭の先端部が鉛筆の芯のように尖らす加工が行われているのに対し、柱の先端部は平らに加工されており、柱と杭でそれぞれ異なっていることが分かります。

舟戸遺跡から出土した土器の中心時期は古墳時代中期中頃に位置づけられます。このこともあり、古津八幡山古墳の年代については古墳時代中期初頭から中期後半まで研究者によって意見が分かれています。

いずれにせよ、舟戸遺跡は杭列を配し、県内で最も早い時期に竈を採用している可能性のある大型の竪穴住居が存在するなど、古墳時代中期において古津八幡山古墳に関係する有力な集落であったことは間違いないでしょう。

今後は、古津八幡山古墳周辺の集落遺跡も含めた調査・研究を行い、周辺集落の様相や動向、また生業などについても把握を進め、この土地に古津八幡山古墳がつくられた背景についてより明らかにしていく必要があります。

弥彦・角田山麓の古墳と集落

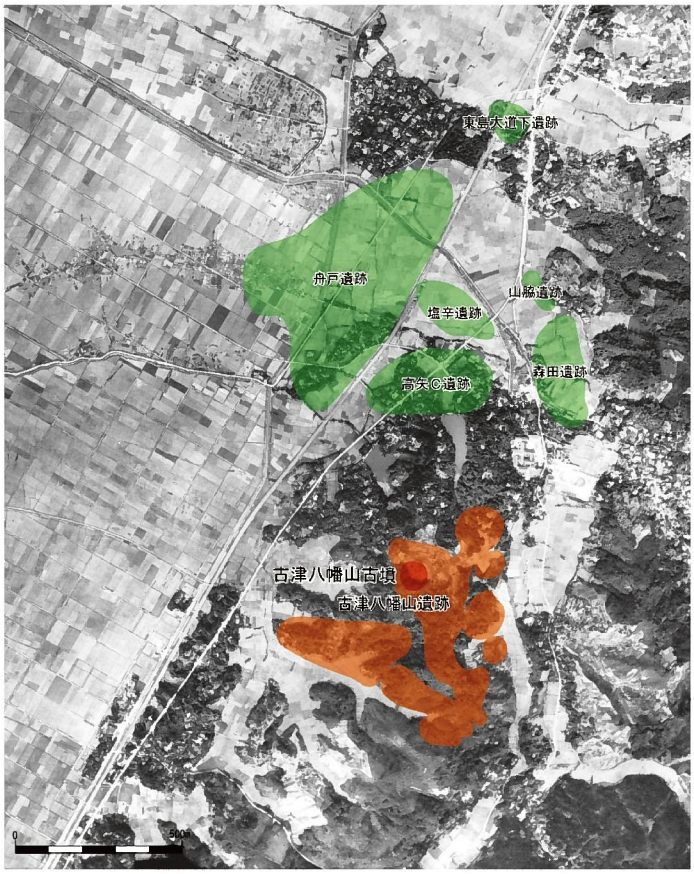
角田・弥彦山麓で古墳との関連が指摘されている遺跡としては、弥彦村の稲場塚古墳とその南方約２㎞に位置する蒲田遺跡、西蒲区の山谷古墳とその眼下に位置する御井戸遺跡、西蒲区の菖蒲塚古墳と同じ台地上に位置する越王遺跡・南赤坂遺跡、西蒲区の観音山古墳とその眼下に位置する高島遺跡があります。このうち御井戸遺跡では、出土遺物や山谷古墳との位置関係などから、山谷古墳をつくった豪族が住んだ遺跡と見て間違いないと考えられています。

（１）山谷古墳

丘陵先端の標高約 43ｍに位置しています。1983・1987 年に発掘調査が行われました。全長 37ｍの前方後方墳で、埋葬施設は割竹形木棺（丸太を縦に割り、各々の内部を刳りぬいて蓋と身にした棺）であると考えられています。この中からは工具のノミのような鉄製品、玉類が見つかっています。出土した土器から古墳時代前期の中頃につくられた古墳と考えられます。

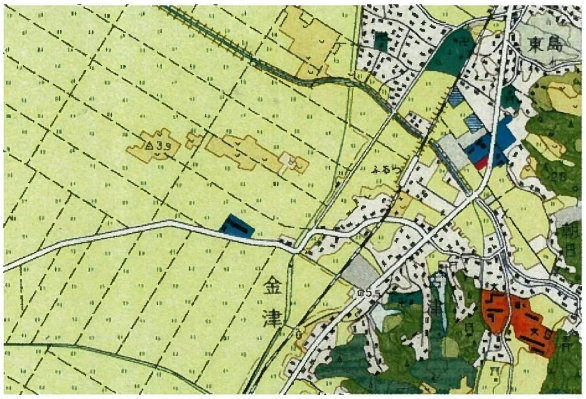
（２）御井戸遺跡

山谷古墳の眼下に位置する御井戸遺跡は、これまでの発掘調査で、縄文時代後期（約 4000 年前）

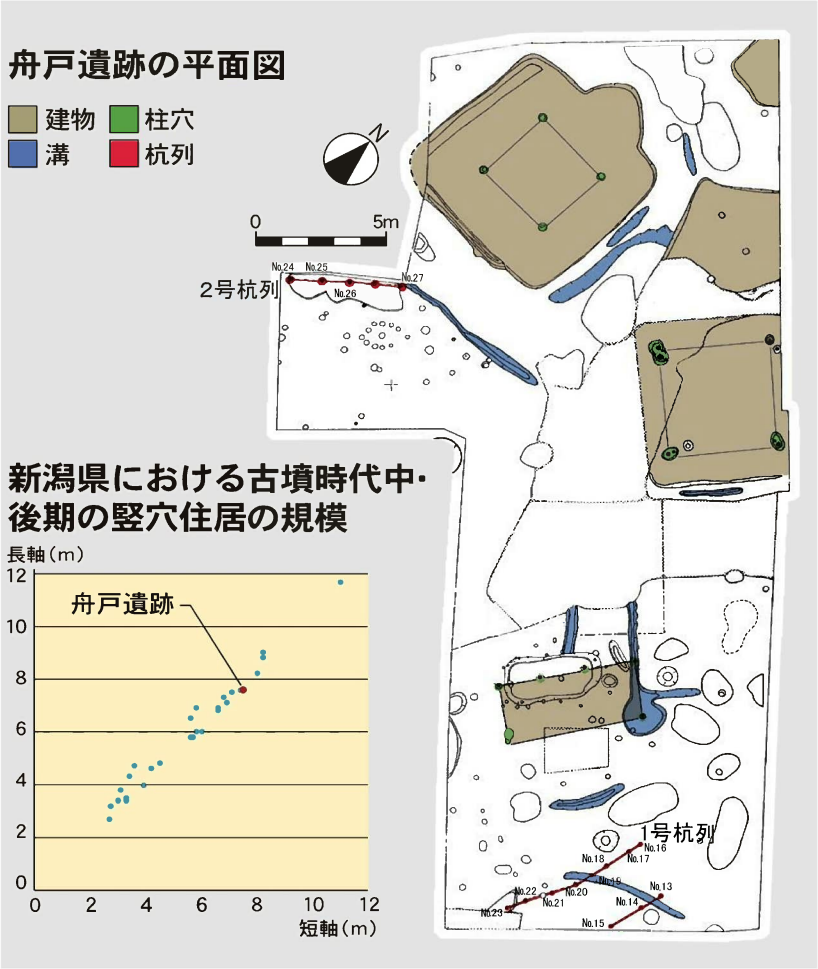


古津八幡山遺跡の麓における古墳時代の遺跡

古津八幡山遺跡北東上空から見た越後平野



国土地理院発行 1978 年『2 万 5 千分の 1 土地利用図　白根』



※杭列のNo.は一覧表のNo.と対応

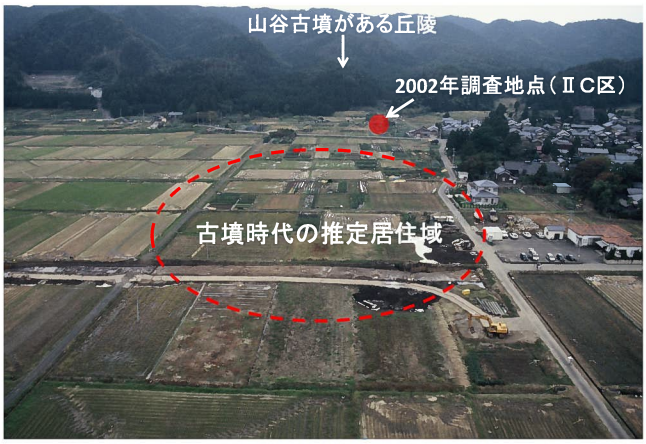
舟戸遺跡平面図

用途	遺構	報告No.	直径（cm）	底面標高（m）	先端加工
木柱	SI2	1	15.0	3.28	平
		2	16.0	3.16	平
		3	16.0	3.34	平
		4	14.0	3.32	平
		5	15.8	3.33	平
		6	15.2	2.89	平
		7	14.6	3.30	平
	4号建物	8	10.5	3.60	平
	5号建物	9	17.4	3.48	平
		10	16.0	3.40	平
		11	14.3	3.50	平
		12	16.0	3.54	平
杭列	1号杭列	13	4.5	3.75	尖
		14	7.0	3.53	尖
		15	6.5	3.60	尖
		16	3.0	3.95	尖
		17	3.0	3.93	尖
		18	8.0	3.84	尖
		19	8.0	3.78	尖
		20	7.0	3.73	尖
		21	3.0	3.94	尖
		22	7.0	3.83	尖
		23	3.5	3.90	尖
	2号杭列	24	10.3	3.34	尖
		25	7.4	3.35	尖
		26	8.2	3.26	尖
		27	6.0	3.32	尖

舟戸遺跡出土の木柱・杭列一覧

舟戸遺跡杭列

舟戸遺跡竪穴住居



御井戸遺跡遠景

御井戸遺跡ⅡC区遺物出土状況

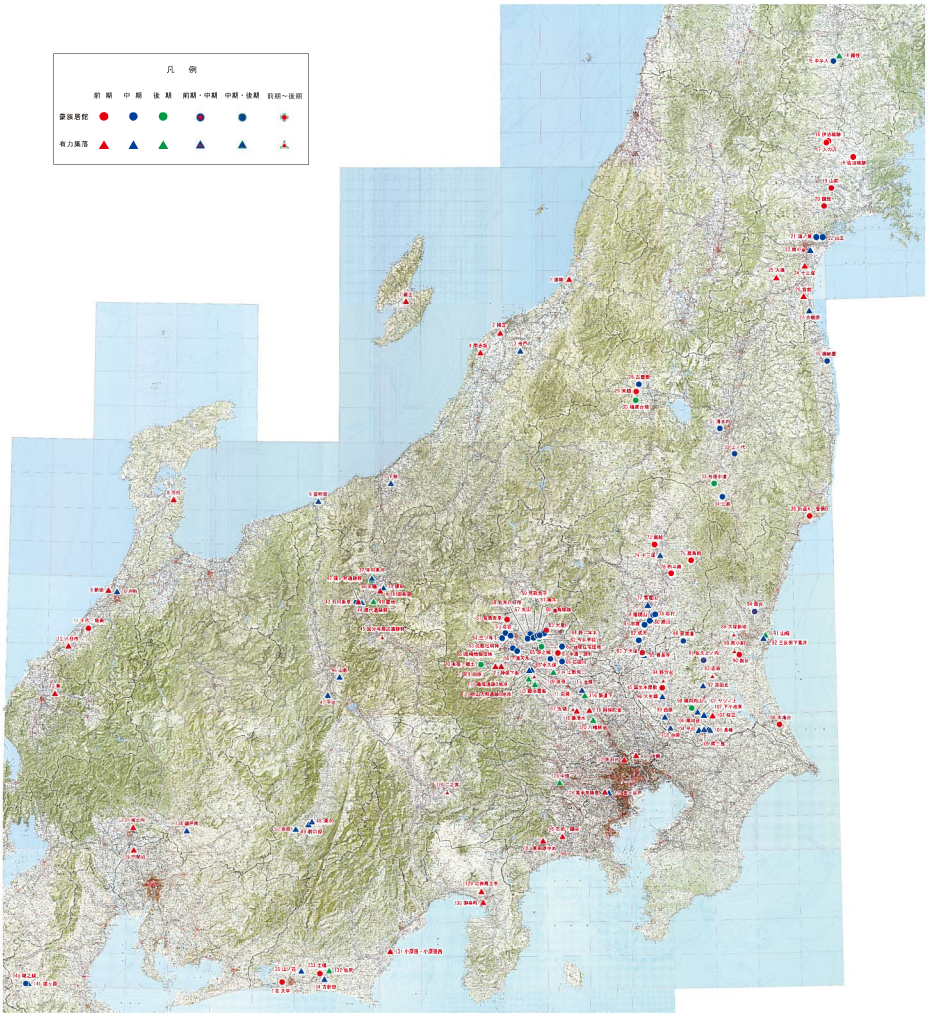
菖蒲塚古墳空中写真

山谷古墳調査風景

御井戸遺跡出土の梯子（左）・土器（右）

古墳時代における続縄文土器と主な古墳の分布

古墳時代の続縄文土器と主な古墳の分布



東日本における古墳時代の主な豪族居館・有力遺跡

から古墳時代中期（約 1500 年前）の拠点的な集落と考えられています。限られた範囲しか調査されていないため遺跡の全容は不明ですが、立地やこれまでに出土した遺物などから、古墳時代には山谷古墳をつくった有力な集落であったと考えられています。

古墳時代の集落は丘陵から舌状にのびる台地上に位置し、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構の分布状況から、丘陵東約 400m辺りが集落の中心域と考えられます。これまでの発掘調査で、弥生時代の終わりから古墳時代の初め頃に遺物が急激に増加することが判明しています。

出土した古墳時代前期の遺物としては、大量の土師器の他、管玉や勾玉、ガラス小玉といった装飾品、鶏の頭を模した杓子形土製品、機織りに使用した木製品・ヒノキの梯子など、豊富な資料が出土しています。また、古墳時代中期の土師器や須恵器、祭祀に使用したと考えられる石製模造品なども出土しています。

2002 年に調査したⅡＣ区では、山谷古墳の眼下約 200ｍの地点で、集落の中心域と古墳とを結ぶ方向で帯状に多数の土器が廃棄されていました。土器は山谷古墳と同時期のもので、集落から古墳へ至る通路脇に祭祀に伴い廃棄された可能性もあります。

なお、御井戸遺跡は古墳時代の日本海側における北海道に起源をもつ続縄文土器分布の南端に位置します。続縄文土器は山谷古墳よりやや古い時期と考えられます。山谷古墳に埋葬された御井戸遺跡の首長が、生前に北方と何らかの接触を行っていたことを示唆する資料といえます。

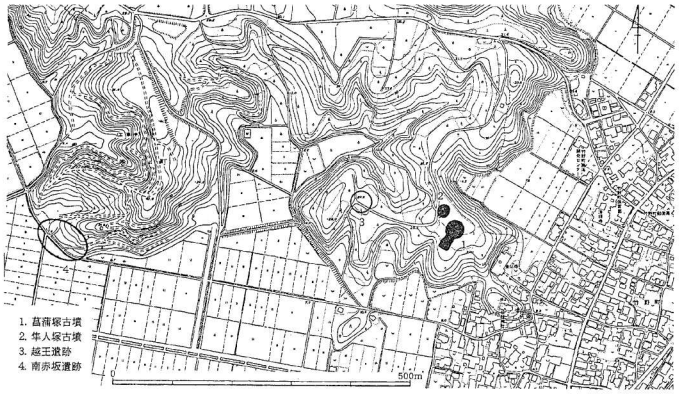
（３）菖蒲塚古墳

菖蒲塚古墳は日本海側最北の前方後円墳で、古墳の形や、ヒスイ製の勾玉や鼉龍鏡などの副葬品などから有力な豪族の古墳と考えられています。角田山麓は日本海側における前方後方墳、前方後円墳の分布の北限にあたり、古くから有力な豪族が存在していたと考えられます。

菖蒲塚古墳の西約 500ｍに位置する南赤坂遺跡では、続縄文土器や地元の土器と続縄文土器との折衷土器、皮なめしに使用したと推測される石器などが出土しており、北方人の居留地であった可能性が指摘されています。玉や鉄など西方の物や情報を求め、北方から人が日本海を経由して角田山麓にやって来たと推測されます。

南赤坂遺跡は、住居数が少ないことや、南側の傾斜地という立地も含め、豪族の屋敷地とは考えにくい状況です。また、菖蒲塚古墳に近く、玉作り関係資料が採集されている越王遺跡は、未調査のため不明な点が多いですが、こちらも立地などから豪族の屋敷地の可能性は少ないといえます。

今のところ、確実に菖蒲塚古墳をつくった豪族の屋敷といえるような遺跡はなく、菖蒲塚古墳眼下の低地部に遺跡がまだ埋没している可能性もあります。



菖蒲塚古墳・南赤坂遺跡などの位置関係

新潟市内の豪族居館について

これまで見てきたように、新潟市内において古墳と集落との関連性を指摘し得る遺跡としては、古津八幡山古墳と舟戸遺跡、山谷古墳と御井戸遺跡などがあります。

古墳時代中期の大型円墳である古津八幡山古墳に対応する居住形態は、先に見た橋本博文氏の区分に従うと中・小型居館になります。

舟戸遺跡では、大型の竪穴住居や掘立柱建物が確認されており、杭列の存在も含めて古津八幡山古墳に関連する豪族居館である可能性が高いと考えられます。

また、古墳時代前期の前方後方墳である山谷古墳に対応する居住形態は、橋本氏の区分に従えば屋敷地あるいは中・小型居館になると推測されます。

御井戸遺跡では、これまでに古墳時代前期や中期の平地式建物や複数の掘立柱建物などが微高地において確認されています。この微高地を挟んで南北にある東西方向にのびる北部埋没谷や南部低湿地、微高地内にある複数の直線状の溝の広がりなどについては調査範囲が限られているため不明ですが、豊富な内容の出土品からは一般集落とは考えられず、やはり山谷古墳に関連する遺跡であるといえるでしょう。両遺跡とも今後の調査・研究により集落の様相が明らかになっていく事が期待されます。

東日本の豪族居館の分布

東日本の豪族居館の分布を見ると、地域によって有無や多寡に違いが見られます。県別で見ると、群馬県で突出して多く、次いで栃木県、そして福島県、宮城県、茨城県でも一定数確認されています。また、長野県や静岡県でも少数ながら確認されます。

それに対して、日本海側の新潟県や富山県、太平洋側の埼玉県、東京都、神奈川県、千葉県などでは、確実に豪族居館といえるような遺跡は今のところ見つかっていません。もちろん、これら都県でも今後新たに見つかったり、これまで見つかっている有力な遺跡の中で、周辺の調査が進み豪族居館と判断される遺跡が出てくる可能性は高いといえます。ただし、群馬県や栃木県のように豪族居館が多く見つかる状況は、現時点において考えにくいともいえます。

福島大学教授の菊地芳朗氏は、群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡や福島県古屋敷遺跡のような「典型的な豪族居館」の事例が限られていることなどから、橋本氏が想定するモデルが時空を超えて普遍性を持つものなのか検討が必要であると指摘しています。

さらに、「典型的な豪族居館」の認められる時期が、古墳時代中期後半から後期前半に集中しているとし、古墳時代前期と中・後期とでは異なる豪族居館像が想定し得る可能性についても言及しています。

さまざまな豪族居館像

豪族居館といっても、地域性やその首長・豪族の身分や役割、遺跡の性格などによって、様相が異なっていた可能性が推測されます。県内では、豪族居館というわけではありませんが、古墳時代前期の村上市道端遺跡で、建物群の北東側に杭列で挟まれた舌状の張り出しが存在していました。複数の掘立柱建物の存在や河川跡に面していることから、港のような機能をもつ遺跡で、古墳をつくらなかった地元の有力者クラスの存在が示唆されます。

市内においても、三ツ寺Ⅰ遺跡や古屋敷遺跡のような整然とした方形基調の堀などを持たない、より小規模で簡易的な豪族居館が存在する可能性なども視野に入れて調査・検討していく必要があります。

村上市道端遺跡平面図（報告書を一部改変）

おわりに

1981年の群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡の調査を嚆矢とし、以後、各地で豪族居館が確認され、研究は飛躍的に進展してきました。

一方、典型的な豪族居館は一般集落に比べて規模が大きいこともあり、居館の一部しか調査されな

い場合が大半を占めています。三ツ寺Ⅰ遺跡においても調査は一部に限られているなど、居館全体の構造については未だ不明な点が多いのが現状です。

他方、事例が増加するにつれて、豪族居館の形態や構造の多様性について明らかになってきており、豪族居館の定義やイメージが不鮮明になってきている側面もあります。

また、三ツ寺Ⅰ遺跡や古屋敷遺跡のタイプの豪族居館が、地域最大の前方後円墳に対応することはほぼ共通理解となっていますが、それ以外の集落と古墳との対応関係については必ずしも十分に解明されておらず、最上位である王宮の実態や、中・小型の「豪族居館」と「一般」集落との相違についても明確になっているとはいえない状況です。

今後は各地域において「豪族居館」や「一般」集落を問わず、分析や比較、あるいは古墳との関連性などの検討を行い、これまでに提示されているモデルケースの検証を進めながら、各地の豪族の住まいの実態を把握していく作業が必要となっています。

企画展関連講演会のお知らせ

古墳時代の集落と豪族居館

講師　菊地芳朗（福島大学行政政策学類教授）
日時　2018 年 10 月 14 日（日）　午後１時半～午後３時半
会場　新潟市文化財センター（展示会場とは異なります）
定員　80 名（申込不要　直接、新潟市文化財センターへお越しください）

文化財センター学芸員による展示解説

日時　2018 年 11 月 10 日（土）　午後１時半～
申込　不要（直接、弥生の丘展示館へお越しください）

関連展示・講演会の予告

企画展「弥生時代環濠集落から古墳時代豪族居館へ」

主催　新潟大学考古学研究室（代表橋本博文教授）
共催　新潟市
日時　2018 年 10 月 11 日（木）～　11 月４日（日）
会場　新潟市新津美術館市民ギャラリー

講演会「弥生環濠集落から古墳時代豪族居館へ」

講師　橋本博文（新潟大学人文学部教授）
日時　2018 年 10 月 13 日（土）　午後２時～午後４時
会場　新潟市新津美術館レクチャールーム

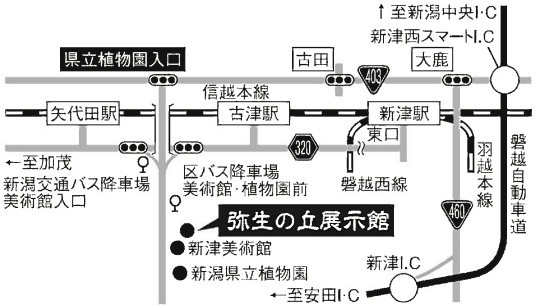
企画展会場

史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

開館時間 10:00～17:00　休館日 月曜日･休日の翌日　年末年始
〒956-0846　新潟市秋葉区蒲ケ沢264番地（花と遺跡のふるさと公園内）
TEL･FAX 0250-21-4133
http://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/rekishi/maibun/kuni_furutsuhachiman

観覧無料

講座会場 主催･問合せ

新潟市文化財センター

新潟市西区木場2748番地1　TEL 025-378-0480　FAX 025-378-0485
http://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/rekishi/maibun/index.html